



トマソン隊じゃないから



横浜市長公邸編 by うさお

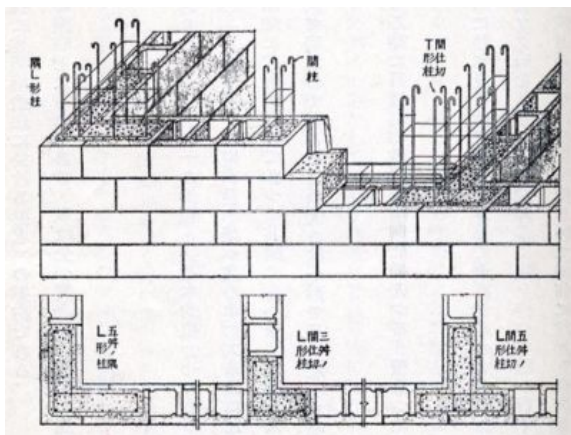
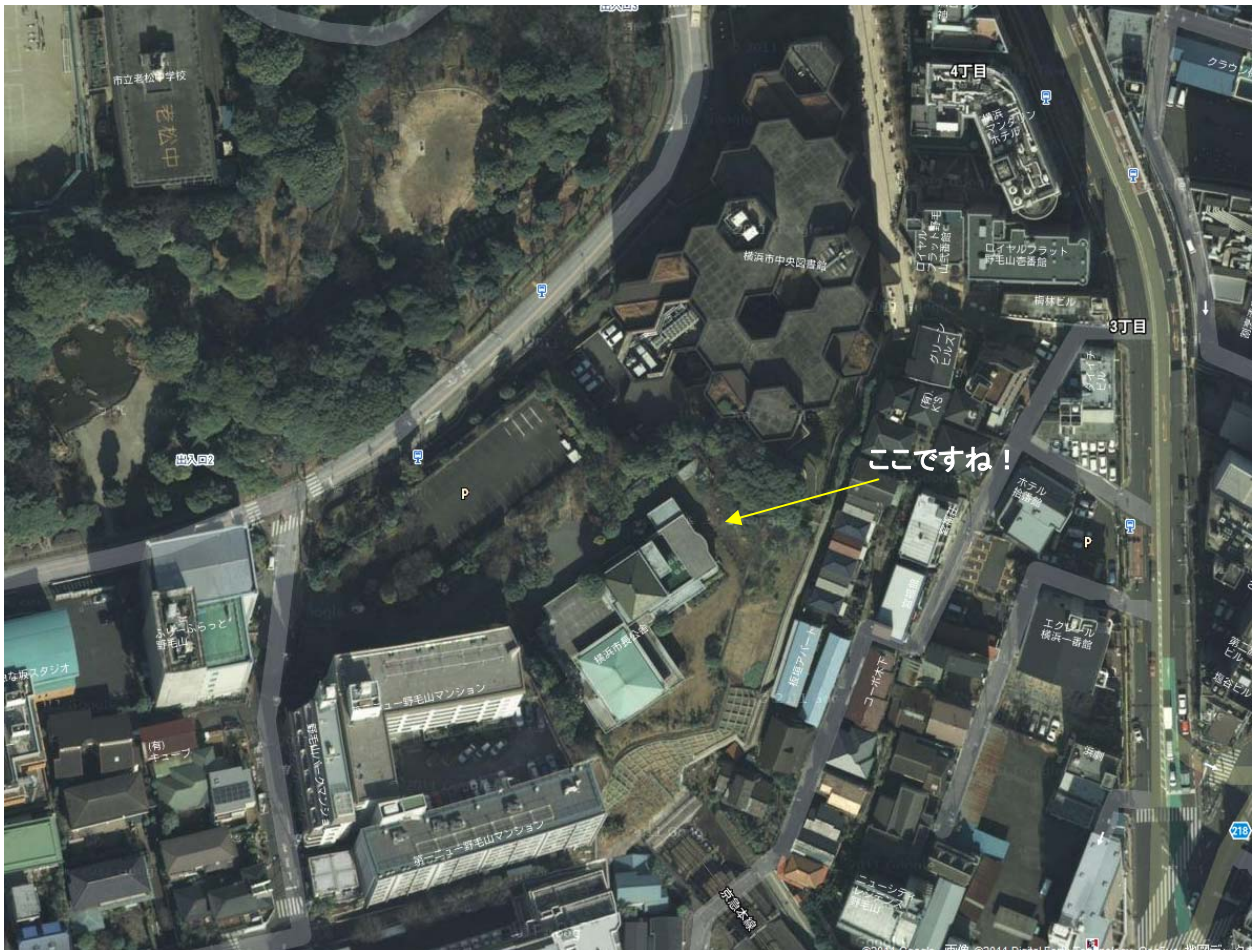
横浜市長は野毛に公邸を持っています。以前ゆうこ宗匠に俳句の中で野毛の私邸と書いてしまい、うさおさんは優雅な処にお住まいで・・・と書かれました。すいません、横浜市長公邸、つまり、「野毛の市邸」と書きたかったのに、トマソン隊にこの原稿を挙げるつもりだったので、その儘にさせて頂きました。ゆうこ宗匠も送られてくるDokugakuの郵便物を見て、明らかに住所が違うなってご存知の筈なのに、敢えて念押しされるので、え〜っ、冷や汗一斗でございました。



さて、野毛の公邸は地図で見ると、京浜急行「日ノ出町」駅から、横浜市中央図書館に向かって坂を上り、左手に折れて野毛山動物園や、野毛山公園に向かう道の途中にあります。子供の時には市長さんが平沼さんだったので、「平沼御殿」って言われていたような気がする。歴代の市長さんは、皆ここに住んでいました。中田市長もこの二階に住んでいたそうです。

現在の林文字市長は、このような贅沢なものを嫌ったのでしょうか、青葉区の御自宅から市庁に通われていました。しかし、3月11日の震災後歩いて市庁に行けないことから、野毛の公邸に住むことを決められたとか。皮肉なことに、この公邸に住むには修理費千七百万円が必要で、市議会に出したところ、なんと市長リコールの嵐に見舞われてしまいました。

竣工は昭和2年のもので、野毛の京浜急行のトンネルの上（横浜市中区老松2番地：上の赤丸の辺り）に建てられています。



関内、伊勢佐木町、桜木町、加賀町（中華街）、元町を見渡せる絶好の立地条件です。

この建物の構造に特徴があります。中村鎮式鉄筋コンクリートブロックと言われるものが使われています。左の図にあるようなやや大きめのコンクリート・ブロックを積み上げ、中に鉄筋を配します。昭和の初期としては画期的だったと思います。

この構造の利点として、組み合わせたブロックの隅角部や開口部にのみコンクリートを打設しており、もの



のすごく施工が早い、鉄筋量が少ない、空洞部を用いて電気配管や衛生配管を通る、空洞部は空気層があるので断熱効果が得られ夏涼しく、冬温かいことなどが挙げられます。

ただし、逆に積石造に近いので地震には弱いでしょうし、空隙の部分が脆弱です。震度七の地震の時にはどうなるのかな。



ここの設計は、横浜市建築課（坂本信太郎、鳥海他郎）の職員が担当しました。この二人が中村鎮博士に教を請いに行き、施工したとのこと。

もちろん、現在は市長が暮らしているので、一般には非公開ですよ。建物の外観はフランク・ロイド・ライトの作品に酷似していますが、市の職員さんが設計したんですからね。もともとは洋館と日本家屋からなる「市長住居」だったらしいのですが、日本家屋は取り壊し集会場にしちゃいました。

（パーティ会場かな。）

右側の薄焦茶色の建物が公邸で、右側のオレンジに見える建物が集会場です。

『INVITATION to OPEN YOKOHAMA 2010』のイベントの時にここが公開されました。2011年11月3日にトマソン隊は訪れています。

意外と小ぢんまりとした佇まいで、一般庶民の住宅と大して変わりません。いや、庭の広さは尋常ではないか。

確かに茶色の外装は温かみを感じ、あの当時の人たちが如何にライトに傾倒していたかが判ります。

ライトと同様、クリンカータイルと大谷石の組み合わせ、大谷石は最近の大気汚染の影響かやはり表面がぼろぼろになっていました。

デザインの基調は井桁のような模様が使われています。





母屋に突き出たこの部分が、なんだか懐かしくてとっても良い雰囲気です。

普通の家と同じようなものかと思いましたが、やはり微妙に大きさが大きいぞ。

寸法が900mmモジュールではなく、1000mmモジュールなのかも。

何にしても三島由紀夫の小説に出てくるような豪邸、そんな感じだな。

まっ、庶民のものじゃないね。

Caccoは背が高いから、このように覗き込めちゃうよ。



その角を回って、庭のほうに出してみました。するとそこはこんな感じの平屋造りのお家です。

なるほど、バルコニーもあって、中々お洒落なつくりだ。天井高の高そうな、やはり外観も大きい建物だ。

庭へのアプローチは素朴だけれど、中々良い感じですが、でも自宅にしては、少し大味かな。



庭はここでも園遊会が出来そうなくらい、広い庭でしたが南側が急な斜面で酔っ払って足を踏み外すと一気に日の出町の駅まで落ちちゃいそうだ。

この2階部分が住居がある処で、1階はダイニングや応接室が幾つかありました。手前側のガラスの部屋は、サンルームとテラス。う〜ん、市長選に出ちゃおうかなあ。



庭の向こうに、関内、伊勢佐木町、元町、山手が見えます。結構ここでも双眼鏡片手に遊べると思うのだが、毎日暮らしていると、もの珍しくも無くなって見たくも無くなるのかもなあ。

この公邸に毎日車で帰るのなら良いけど、歩いて帰るには野毛の坂がきついかも知れない。御酒の好きな人は市長選に出ちゃだめだね。

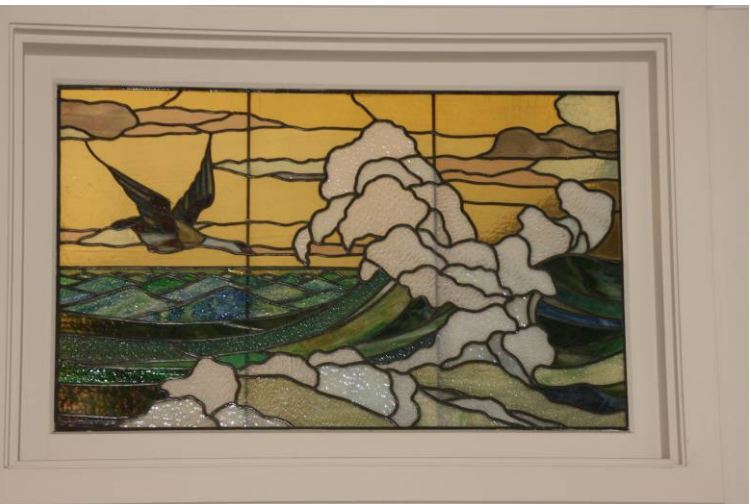


サンルームから食堂に入って見ると、見るからに口の悪い執事でも出てきそうな、長い食卓が現れる。うさおは呼ばれても末席だろうから、主人である市長の声は届かない。届かないから会話は成立しない。従って言いたい放題である。

「市長様の目は節穴でございますか？」文子市長は言う。「何よ！ 鹹よ！ 鹹！ くびっ……」

さて、幾つかのステンドグラスの絵が微妙に凝っていた。値段は高いのか？

横浜と言うので、鷗の図柄かと思ってはいたが、何だか鴨っぽいなあ。「かもめ」から「め」を取っただけだから関係なくは無いけれど……



上の図柄が山あいを飛ぶ鴨か、すると下の図柄は波間を飛ぶ鴨と言うことになるが、鷗？ 北斎風の波に西欧風のステンドグラスの細工が何だかちぐはぐだ。色遣いも気になる。

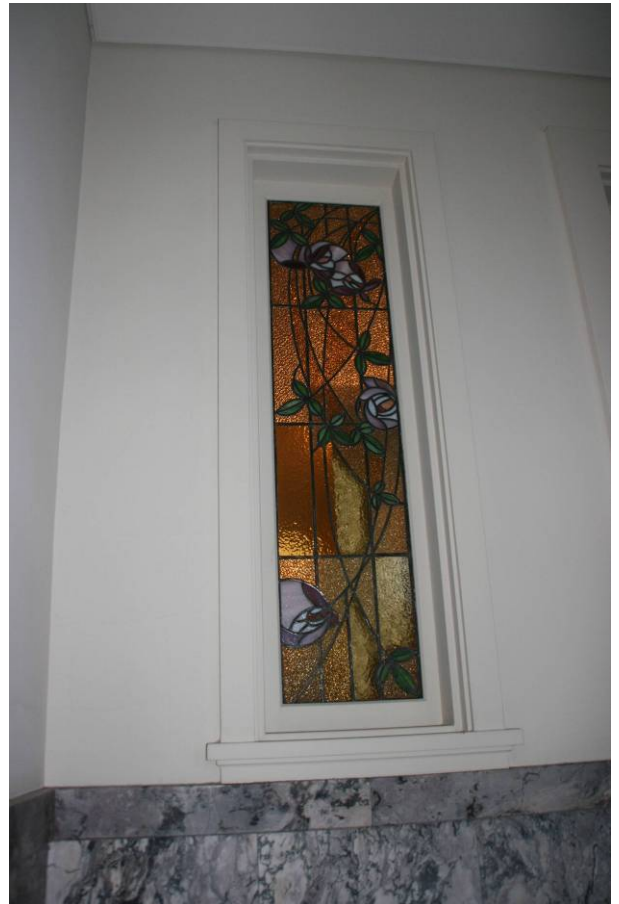
黄色を主体にした暖かい色合いにしたのだろうが少し気に入らない配色だ。



凝っているのはステンドグラスだけではない。
このシャンデリアも昭和の初期を感じさせる。何か
の花を表しているのだろう。

シャンデリアも、この玄関ホールの照明もアール・ヌーヴォー調と言えばよいのか、昭和に作られたものとは言え大正を感じさせる造りだ。

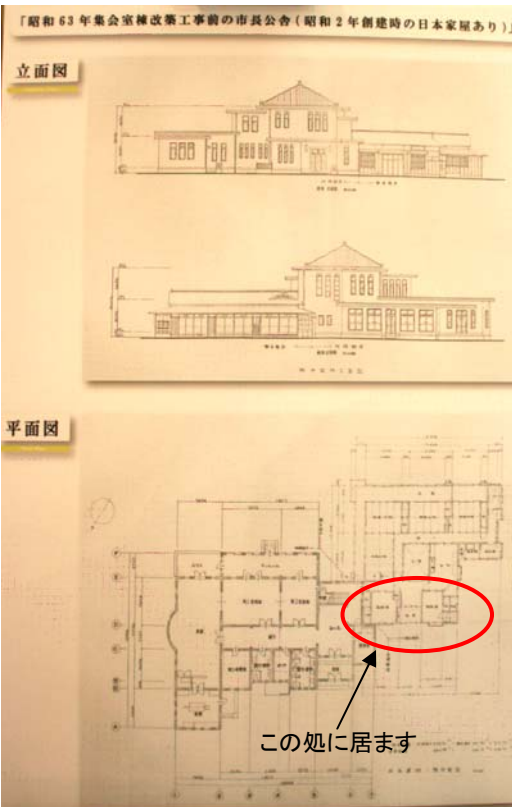
素性のよさそうなこの壺は、花活けなのか、傘立



なのか、豪華なのだが少し野暮ったく感じるのは
何故だろう。



ここが昔の和室の処、今は改修されて集会室になっています。少し薄暗いけど外国のお客さんは結構喜ぶかも。



中は意外に天井が低く感じます。この辺りが少し田舎臭くと言うか、野暮ったいと言うか、まあ、自分の家ならまったく問題ありませんよ。十分な高さです。

広いからこそ、そう感じるのかもしれませんが、うん・・・羨ましいのかも。中ではこの公邸の歴史と言うより、横浜市の歴史を説明して言ったのは、またあの横浜国立大学の吉田鋼市先生でした。(覚えていないかなあって、まだ発表もしていない帝蚕倉庫の説明会の時の話だけれどね)



さて、この公邸には絵画とちょっとチープな美術品(と言うか、骨董品?)が陳列されていました。

この棚には多分寄贈されたと思しきものが、うさおの家のようにごった混ぜに飾られていました。もっと広々と飾らな



いと本当に貧相に見えちゃいます。その幾つかを紹介しておきますね。

何やら判らない中国の船の模型。比較的新しそうだ。



この二枚の絵画は、食堂の壁に掛けられていたもの。さすが横浜だけあって港の絵だ。左の絵は大栈橋と山下公園だと判るが、なんだかもちやりしているなあ。もっと写実でもよさそう。



このジャックの絵は、結構好感が持てます。水彩画ですが、雰囲気があります。日本人形のほうはちょっと恐いです。

兎も角、めったに見れないものを見ることが出ました。

